

東京大学大学院総合文化研究科 グローバル地域研究機構中東地域研究センター
[スルタン・カブス・グローバル中東研究寄付講座]



UTCMEs ニュースレター

VOL.19 2021

1. 新企画連載 この一品——私の研究モノ語り 1	3. 駒場中東セミナー開催報告 6
(1) 和田 夏音 1	4. 今後の駒場中東セミナーのご案内 10
(2) 木下 美紀 3	5. バフワーン文庫より：5年目の節目に これまでの文庫の軌跡を振り返る（前編） . . . 10
2. 新任スタッフ紹介 5	6. センターの活動紹介 12
(1) 大塚 修 5	7. スタッフ・発行者情報 12
(2) 宇田川 彩 5	

1. この一品——私の研究モノ語り

趣旨説明

第19号より、ニュースレターの企画として「この一品——私の研究モノ語り」という連載を立ち上げました。中東研究で扱われる領域の広さを鑑みれば、ひとくちにモノと言っても共通理解が存在するわけではありません。宗教的な聖遺物を思い浮かべる方もいれば、写本や建築遺構に思いを馳せる方、友人にもらった手作りの小物の思い出を語る方もいるでしょう。

この連載では、自身の研究の来歴や専門領域、そして中東地域に深くかかわるモノを取り上げることを通し、一見私的なエピソードからも研究の本質を存分に語っていただくことを企図しています。「モノ語り」とはまさに、モノ自体を通して歴史物語が語られることであり、また古来人間と環境との間の相互作用に育まれた中東ならではの文明を語るきっかけとなるはずです。

執筆陣には、駒場中東セミナーでお話いただいた講師の先生に紹介をお願いし、各大学研究室から若手研究者をお招きしています。セミナー各講演と併せてお読みいただければ、中東研究の奥行き・広がりともに感じることができのではないのでしょうか。研究室同士のリアルな交流もままならない

ご時世ですが、他研究室の様子をちらりと覗き互いの研究を知るような連載になることを願っています。

記念すべき第一回目は、建築学と文学という全く異なる専門領域のお二人からご寄稿いただきました。企画者も、どのような連載になるのか期待に胸高まらせています。皆さまどうぞご期待ください（宇田川 彩）。

(1) この一品——私の研究モノ語り「都市の回りもの」

筑波大学大学院システム情報工学研究科修士課程 和田 夏音



海外旅行に行くと、為替レートや旅行中の予算の関係で、帰国時に半端な金額の貨幣が余ることがある。空港によってはそういった旅行者向けに募金箱が設置されていることもあるが、海外旅行が好きな方の中には、土産代わりに各国の通貨を持ち帰る場合もあるだろう。筆者はどちらかとい

うと後者である。親族に地理を教えている教員がおり、教材として頼まれることもあるため、今まで旅行で訪れた国の通貨はできるだけ保管するように心がけており、各国の通貨デザインというものに興味を惹かれることが多かった。

外国の通貨が地理の授業になぜ役立つかということ、各国の「お国柄」を知るにはもってこいであるからだ。日本円の硬貨には桜や菊、紙幣には平等院の鳳凰像や富士山が描かれているのと同様、インドのルピー紙幣にはマハトマ・ガンジーが、モロッコのディルハム紙幣には国王が描かれているといった具合に、通貨にはそれぞれの国の歴史的遺産や偉人等が印刷されていることが多い。

筆者が現在暮らしているアルジェリア民主人民共和国（以下、アルジェリア）の通貨はディナール（DZD）である。紙幣は500、1000、2000ディナールで、小銭が5、10、20、50、100、200であり、1ディナール＝約0.8円であることを考えるとやや細かい。クレジットカードが利用できる店舗も少ないので、大きな金額の買い物をする場合には札束を持ち歩くことになる。また海外ではよくあることだが、アルジェリアの通貨は日本の通貨と比べて経年劣化の激しいものが廃棄されることなく流通し続けているため、破れた部分をテープで修復した紙幣や、擦り切れて図柄の見えにくくなった硬貨が普通に使われている。古くなった紙幣や硬貨は色褪せている上に色や形が似ているため、買い物の際には自分が今支払おうとしているのは何

ディナールなのか、注意深く観察する必要がある。そこでディナール硬貨や紙幣へ目を向けるようになると、意外にもこの国の様々な特徴が見えてくる。国土の大半をサハラ砂漠が占め、高山地帯や地中海に面した地域もあるという雄大な自然を象徴するかのようにウマやシカ、バッファロー等が多く描かれているほか、先史時代、ローマ帝国時代、イスラームの時代の様子も描かれており、それぞれの貨幣デザインからアルジェリアの歴史を窺い知ることができるのである。ここでは、そうした歴史の中でも、特に都市の歴史に着目してみたい。

冒頭写真左上の旧500ディナール札(旧といっても、新紙幣があまり普及していないため一般的に使われている)にはローマ時代の遺構や、ヌミディア王国とローマ帝国の戦いが描かれている。他のマグレブ諸国(モロッコやチュニジア、リビア)と同じく、実はアルジェリアにもローマ時代の遺構が多く残っている。特に有名なものは首都アルジェ近郊、ティバザ県のシェルシェルやバトナ県のティムガッド、セティフ県のジェミラといった町に存在する遺跡群が挙げられる。これらは当時の繁栄の様子を現在まで残しており、いずれもユネスコ世界文化遺産に登録されている。写真の旧500ディナール札に描かれているのはコンスタンティヌ県エル・クラブにあるヌミディア王国マッシニッサ王の墓である。ヌミディア王国はアルジェリア北東部に存在していたベルベル系の先住遊牧民による国家であったが、ローマ帝国内でのカエサルとその反対勢力を発端とする内戦のあおりを受けて滅亡し、ローマ帝国の属州となる。後にアルジェリア西部も属州となり、ローマ式の都市が建設されることとなる。なお、前述したシェルシェルの当時の都市名はカエサルにあやかっただけで「カエサル」であった。都市の中央には、カルドとデクマヌスからなる舗装された主要通りが直線的に敷かれ、碁盤の目状に住居や神殿・浴場・劇場・市民広場といった公共施設が配置された。またローマ式の都市において欠かせないのが、小さく着色された陶器の欠片を組み合わせて作成されるモザイク画である。ギリシャ神話等をモチーフに神や人物・動物といったモチーフが数多く描かれている。

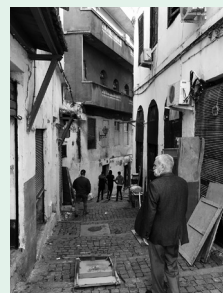
ローマ帝国によるアルジェリアの支配は紀元5世紀頃まで続き、その後はヴァンダル王国やビザンツ帝国といった勢力が支配を行っていく。7世紀以降、アラブ民族による西方征服に伴いイスラーム教がアルジェリアに普及していき、文化や都市の構造にも影響を与えていった。商業活動を奨励す

るイスラームの教えに基づいてムスリム商人が活躍し、通りに面する富裕層の住居等の建物は分割されて町家のように細長い店舗となり、主要通りは細く曲がりくねったものへと変化した。また「公私の分離」、すなわちプライバシーの確保を最重要とする考え方から住宅は窓や庭といった外部ではなく内部へ開かれた様式へと変化した。吹き抜けた中庭を持つ構造が主流となった。

旧100、200ディナール札(現在は同額の硬貨が流通しているためほとんど使われておらず、筆者も実物を見たことがない)には、モスクのミナレットが立ち並び風景やアラベスク文様があしらわれている。偶像崇拝を禁じているイスラームの世界においては、キリスト教会の装飾にみられるような人物・動物画といった装飾はみられず、代わりに植物の紋様や、コーラン、ハディースの文言を記したイスラーム書道の彫刻による装飾が施されているものが多い。隣国モロッコに留学していた頃の経験に照らしてみると、アルジェリアとモロッコはいずれもマグレブの一国であり地理的にも文化・宗教的にも共通点が多いが、ミナレットの形状に差異がある点は興味深い。モロッコのモスクにあるミナレットは非常にシンプルな形状のもので、凝ったアラベスク文様の彫刻が施されているようなものであっても、形自体はほぼ四角柱そのものといったものが多くみられる。他方アルジェリアでは四角柱型も存在する一方、複数のバルコニーが供えられた八角柱型や円柱型といったオスマン帝国様式のミナレットもみられるのは注目すべき点である。

またイスラームを国教とする国である以上モスクは各所に点在するが、アルジェリアの首都アルジェには他のイスラーム文化を持つ国々のようないわゆる「旧市街」と呼ばれる、細く曲がりくねった街路が迷路のように建物の間を走り、中庭のある住居がびっしりと立ち並ぶような街並みはほとんど残っていない。これはかつてフランスによる統治が行われていた時代に大規模な都市開発が行われたことに起因する。現在、アルジェ中心部で伝統的なイスラーム社会の都市の特徴がみられる唯一の場所は「カスバ」であり、フランスとの独立戦争の激戦地となった場所である。カスバの中を実際に歩いてみると、一般的な旧市街よりもきちんと丸石で舗装された道路が続く、はるかに清潔な状態であることに驚く。もちろん、これはモロッコのフェスのような世界的な観光地とは、訪れる人の数も違うため直接比較することは適切ではないものの、そこに住む人々が自主的に行っている保全活動を感じることができる。更

に歩いてみると、老若男女が集まってカスバ内の階段を清掃している光景に遭遇することもあった。130年にわたる植民地統治によって歴史や文化が破壊され、一般的に自国の歴史認識が希薄といわれるアルジェリア人であるが、カスバの持つ歴史や伝統的な街並みの重要性は世界遺産であることを抜きにしても広く認識されており、アルジェ県内外から街区の校外学習等で訪れる児童や一般市民も多いという。しかし一方で、カスバ内の多くの建造物は経年劣化の状態が深刻であり、そこかしこに傾きかけた建物やアーチ部分を支えるために付け焼き刃的に供えられた支柱や木の骨組みが散見される等、建物の適切な保全が行われていないといった問題も抱えている。アルジェリアは自然災害が多く、地震や風雨等によってカスバ内の建物が倒壊した、といった事件は頻りに報道されている。カスバはアルジェリア国民にとって歴史的・文化的に重要な地区であり、建造物及び街路の保全は喫緊の課題である。



1830年から1962年まで続いたフランス領時代においては、植民地政策に基づきアルジェでも大規模な都市計画が実施された。アルジェリアのフランス統治の歴史においてモロッコやチュニジアと大きく異なる点は、既存の都市構造・文化・政治構造等をないがしろにし、ヨーロッパ入植者(コロン)のための都市開発が行われた点にある。イスラーム運動の高まりにより反乱を恐れた当地のフランス総督府はモスクの取り壊しやカトリック教会への改装、ハッジ(聖地巡礼)の禁止といった政策を行い、ヨーロッパ系入植者が多く住む自治体のみ地方自治が認められた。伝統的な都市構造も徹底的に破壊され、従来の旧市街の構造から、自動車の通行を前提とした大通りが広場を中心に放射状に広がり、窓やバルコニーを持つ高層住宅が立ち並び「新市街」が建設された。この方法は、19世紀のセーヌ県知事オスマンが行ったパリ大改造に範を取ったものであり、フランス領となった多くの国で同様の都市開発方式が実施されている。

このようにして生まれたアルジェ中心部の街並みは、アルジェリア独立の直後に制作された映画「アルジェの戦い」において垣間見ることができる。この映画は植民地時代の末期におけるアルジェリア独立戦争

の様子を描いたものであり、新市街やカスバ等、実際のアルジェ市街を舞台に制作されている。映画では実際の独立戦争の状況を忠実に再現するため、史実でのゲリラ参加者を含むアルジェリア市民が撮影に参加しており、迷路状に入り組んだカスバを舞台に女性や子供を含むアルジェ市民が壮絶な戦いを繰り広げている。映画のラストシーンでは住居に立てこもったゲリラの主犯格4人が、投降を呼びかけるフランス軍に応えることなく爆弾の爆発に巻き込まれる。実際のカスバにも、当時の4人を独立戦争の英雄であるとして称えた壁画が描かれている場所がある。また新市街を歩いている、バーやダンスパーティ会場といったヨーロッパの社交場が消えたことを除けば、今現在も半世紀以上前の白黒映画に登場する街並みがほとんどそのまま残っていることに驚かされる。従来の歴史や文化を破壊して作られた新市街は、歴史の重要な一部分として残されていくのか、かつての旧市街のように現代化の波に乗って再び開発されることとなるのか、今後のアルジェ市街の変遷は注目すべき点である。

ここで最新の紙幣に目を向けてみよう。現在の2000ディナール札(写真右下)や500ディナール札(写真左下)など、2010年代に入ってから新たに作られた紙幣デザインは、大学や研究機関、新市街風の高層アパートマン、人工衛星といったように、技術の進歩を強調したものとなっている。今年の初めにはそれらに加えて、新たな2000ディナール札のデザインが発表された。新紙幣にはアルジェリア独立運動の中心組織であったFLN(民族解放戦線)の幹部6名の肖像画が描かれており、アルジェリアのアイデンティティと(主にフランスへの)反骨の精神が強調されたものとなっている。

前政権の汚職や民主デモといった政治危機、石油頼りの経済からの脱却、大地震、気候変動に伴う自然災害の頻発に水不足、そしてコロナ禍と、一昨年によく政権交代が実現したアルジェリアの眼前には課題が山積している。今月に入り新たな都市計画法を策定したアルジェリアは、今後どのように都市を築いていくのか、注目していきたい。

【私の研究室】

筑波大学理工情報生命学術院・都市文化共生計画研究室では、世界各地の都市計画、都市保全を研究しています。中東・北アフリカ地域を中心に、アジアや南米といった途上国の都市の歴史と空間、建築に関するフィールドワークを行っています。

(2) この一品——わたしの原点、これにあり 大阪大学言語文化研究科言語社会専攻博士後期課程 木下 実紀

今回、「私の研究モノ語り」というタイトルで原稿を引き受けてから、締め切り間近まで何について書くべきか、考えあぐねていた。やはり自分にはこれしかないと思い、選んだのは、2冊の本である。私がペルシア語を学び始めた時から使い続けている『現代ペルシア語辞典 ポケット版』(黒柳恒男著、1996、大学書林)と、修士論文で題材としたペルシア語版『エスファハーンのハージーバーバーの冒険』(ジェームズ・モーリア著、1996、ミールザー・ハビーブ・エスファハーニー訳、モハンマドアリー・ジャマールザーデ編、マズダ出版)である。

大阪大学入学後、一番はじめに買った『現代ペルシア語辞典』は、もう使い始めて9年目になる思い入れある辞書である。9年間、ほぼ毎日欠かさず持ち歩き、時には雨に濡れ、お茶をこぼすこともあった。何度か表紙が剥がれ、糸綴じがほどけて落丁することもあったが、保護テープでどうにか繋ぎ止めている。長く使って劣化もしてきているが、それとともに愛着も湧き、私にとっては相棒そのものである。調べたことがある単語には丸印をつける習慣は9年間継続しており、大学院試験のために準備していた時期にはこの印がついている単語を洗いざらい復習した記憶がある。最近と同じ単語に何度も印をつける自分に嫌気がさしているが、そのうち使い続けていけば全ての単語に印がつくのではないかと楽しみにしている。



2冊目に取り上げるペルシア語版『エスファハーンのハージーバーバーの冒険』は、私が本格的な研究生活を始めると同時に読み始めた本である。原作はイギリスの外交官であったジェームズ・モーリア(1782-1849)による小説 *The Adventures of Hajji Baba of Ispahan* (1824) である。卒業論文では英語原作を題材とし、それに続く形でペルシア語版を

研究対象とした。英語原作とペルシア語版を扱う意義は、この2つの版で大きな差異が見られる点にある。なお、英語原作からの邦訳は平凡社東洋文庫から出版されている『ハジババの冒険(1)(2)』(1984、岡崎正孝、江浦公治、高橋和夫 訳)である。

英語原作が1824年に発表されて以降、人気を博した本書は、フランス語版(1824)、ドイツ語版(1825)、そしてロシア語版(1831)が続けて出版された。そして約半世紀を経た1886年、イラン人のミールザー・ハビーブ・エスファハーニー(1835-1893、以下エスファハーニーと略記)によりペルシア語に翻訳された。エスファハーニーは、自らの思想や文学的素養を取り入れながら翻訳したため、少なくとも今日私たちが考えるような翻訳ではない。日本の明治時代の文豪が、西欧の文学を日本人にも理解可能なように土着化したこと(これを一般的にローカリゼーションという)と類似している。

残念ながら、ペルシア語版『エスファハーンのハージーバーバーの冒険』はエスファハーニーの生前に出版は叶わず、1905年にインドのカルカッタで刊行された。以降、本作品はこれまで定評があり、今日でも版を重ねている作品である。

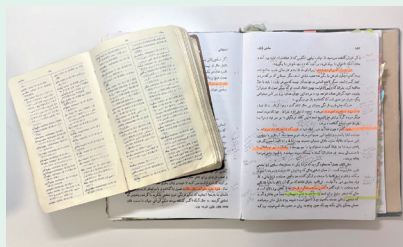
ペルシア語版『エスファハーンのハージーバーバーの冒険』は、カルカッタでの出版に至るまで複雑な過程を辿っており、その地理的な移動は非常に興味深い。訳者エスファハーニーは、イラン国内で弱冠17歳にして文筆活動を始めていた生粋の文人である。彼は、時のイラン国王の宰相に対する誹謗中傷の詩を詠んだこと、そして無神論者であることを理由に起訴され、1866年にオスマン帝国へ亡命した。彼は亡命後、フランス語やオスマン語も習得し、主にフランス語からペルシア語への翻訳活動をするようになった。『エスファハーンのハージーバーバーの冒険』についても、フランス語を主に参照したと言われている。エスファハーニーの亡命から約10年後、立憲革命期の改革主義者として著名なミールザー・アーガーハーン・ケルマーニー(1853-1896、以下、アーガーハーンと略記)と、シェイフ・アフマド・ルーヒー(1856-1896、以下、ルーヒーと略記)が共にイスタンブールに亡命してきた。エスファハーニーは、この2人と共にイラン立憲運動において重要な役割を果たした、イスタンブール発行の『アフタル』紙の刊行において活動を共にした。また、『エスファハーンのハージーバーバーの冒険』についても、この2人は翻訳に協力をしたという。特に、アーガーハーンは

英語が堪能であったため、英語版を参照した上で翻訳に携わった。その後、エスファハーニーは1893年に病により亡くなる。彼の死後、本作品の原稿はルーヒーに託された。しかし、程なくしてルーヒーと、アーガーハーンはナーセロッディーン・シャーの暗殺の嫌疑をかけられ処刑される。この原稿は、ルーヒーの遺品としてイラン南東部のケルマーンに住む両親のもとに送られた。この原稿はルーヒーの筆跡で書かれた写本であったため、当初は彼の作品だと見做されることとなった。その後、この写本をケルマーンの英国領事館大佐であったD.C. フィロット(1869-1930)が受け取り、適宜注釈をつけて1905年にカルカッタで出版した。最終的にエスファハーニーによる翻訳だと判明したのは、イスタンブール大学の図書館で本書の写本が見つかった1961年のことであった。

本作品との出会いは、卒業論文の内容を検討する中でハミード・ダバシの『イラン、背反する民の歴史』(2008、作品社)を読んでいた時であった。英文学の授業でポストコロニアリズムについて学んだ時に、ロシアとイギリスによって半植民地下に置かれたイランの状況はどのようなものであったのか、また、そのような状況で生まれた文学には何があるのかという疑問を抱き、調べていた。ハミード・ダバシによると、『ハージーバーバーの冒険』の英語原作は「ひどく不快な東洋学的・人種差別主義的な笑劇である」一方、エスファハーニーによるペルシア語版は「卓絶した美しさと風格、優雅さを兼ね備えたペルシア語のまさに宝石」である、と絶賛している。彼だけでなく、これまで様々な知識人によりペルシア語版の文学性が高く評されてきた。このような評価の差は何に起因するのかを突き止めるべく、まずは英語原作の分析にあたり、卒業論文では「イギリス人からのイラン人への眼差し——J. モーリア『ハジババの冒険』から——」と題して、英語原作者であるモーリアがイランやイラン人をどのように描いているのかを分析した。今となってはもう読み返したくもない代物だが、モーリアは本作品以外にも旅行記等を遺しているため、今後、英語原作に立ち返ってもう一度検討し直して何らかの形で論文を発表したいと考えている。

その後、博士前期課程に進学した私は、ペルシア語版の『ハージーバーバーの冒険』の読解に取り掛かった。留学も未経験だった当時、ペルシア語能力はとても高いものではなかったため、400ページ近くある長編小説を読むことは非常に長い時間を必要とした。学部生時代に読み慣れて

きたような現代語ではなく、ガージャール朝時代(1779-1925)の少し古いペルシア語だったことも大きな理由であった。既出の『現代ペルシア語』では引いても出ない単語が多く、大学にあるペルシア語-ペルシア語辞書にも載っていないものも、かなりあった。アラビア語由来であれば大抵は明らかになるが、オスマン語由来の単語だったりすると自分の力ではどうにもできなかった。ミスプリントの場合もあった。いつしか、わからない箇所には半透明の付箋を貼って、ネイティブの先生の授業で質問をしていくのが日課となった。適宜取ったメモも本にそのまま貼り付けていったので、付箋だらけになってしまったが、これを見ると苦労していた時を思い出し、自分を奮い立たせることができる。また、論文で使えそうな箇所にも付箋を貼ってあるため、今でも定期的に見直している。



当然のことであるが、語学というものは時間をかけなければ上達しないため、博士前期課程の2年間で飛躍的に能力が上がることもなく、この付箋貼りの作業は延々と続いた。複数の辞書で調べてもわからないことが度重なり、思わず投げ出しそうになった。なぜこれを読むことにしてしまったのか、とやる気も削がれていき、1日あたりに決まった量を読むという目標もたちまち達成できなくなってしまった。結局、亀の速さでしか読み進められなかった私は、修士論文を書き始めた頃になってまだ読み終わっていなかった。最終的には意地になって何とか読み終えたものの、これは苦い思い出である。

苦しい思い出にはなっているものの、研究の醍醐味を教えてくれたのもこの本であった。大学院生になってまだ間もない頃、他専攻の先輩に「研究の90%は苦しくて、残りの10パーセントが楽しいものだよ」と言われた記憶がある。私にとって、この本はまさにその言葉を具現化したようなものである。例えば、理解できない箇所が長く続いた後、英語原作とは明らかに違う箇所を見つけたり、興味深い記述があったりと、論文の材料となりそうな箇所にも当たるが多かったように思う。その

ような瞬間こそ、達成感を味わい、やる気を取り戻すことができたのであった。

最終的に、ポストコロニアリズムからは幾分離れた観点から修士論文を書くこととなった。それは、イランにおけるポストコロニアリズムを検証することはかなり困難を伴うことに加え、自分の関心が徐々に訳者の翻訳手法に向いていったためであった。作品を読み進めるにつれ、英語原作との差が如実にあらわれていったためである。例えば、作品中の適切な場面に、訳者による創作詩の挿入や、サアディーやハーフェズといったイランを代表とする古典詩人の詩を援用していることが明らかとなった。また、話者の職種や地位によって語彙を変えていることや、役人の悪行や宗派間の対立を非常に誇張している点など、エスファハーニーによる創意工夫は目を見張るものがある。私はここから、本作品を翻訳と捉えるのではなく「翻案」として捉えるに至った。修士論文では、これらをまとめて「ミールザー・ハビーブ・エスファハーニー訳『エスファハーンのハージーバーバーの冒険』に見る翻案手法」と題して論文を完成させた。

現在は、『エスファハーンのハージーバーバーの冒険』とおよそ同時代に外国の作品から翻案された他の作品も対象として研究を進めている。複数の作品を読んでいると、当時の翻案は、立憲革命という時代背景も相まってローカリゼーションでは済まされないレベルで原文が変化しているように思われるのである。今後、博士論文を執筆するにあたり、当時の訳者が作品を翻案した狙いや、訳者にとっての翻案の意味合い、また翻案文学が立憲革命期前後の時代に持つ意味合いとその位置付けについて、研究を深化させていきたいと考えている。

【私の研究室】

私が所属する言語社会専攻は、主に専攻語ごとに分かれているため、規模が大きい研究室はあまりないように思われる。私は学部時代から継続して藤元優子教授から指導を受けている。教授は、イラン現代文学とジェンダーをご専門とされ、近年はイラン女性文学を研究されている。博士前期課程の時から、ペルシア語専攻の院生は私の他にいないため、指導教員の授業はもちろん、大学院での授業のほとんどは全てマンツーマンという贅沢な研究環境である。学部時代から、ペルシア語専攻は少人数で教員と学生の距離が近く、先生方に相談しやすいアットホームな雰囲気が強みである。

2. 新任スタッフ紹介

(1) 就任にあたってのご挨拶 大塚 修

2021年4月1日より、スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座の兼務准教授に就任いたしました。この講座を長年にわたって支えてこられた杉田英明先生が2020年度末で東京大学を退職され、それを受けての就任となります。明らかな戦力ダウンではありますが、微力ながらも今後の講座の発展に尽力していきたいと考えておりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

私の所属は総合文化研究科地域文化研究専攻ですが、専門は歴史学で、これまで中東地域の歴史研究に取り組んでまいりました。私がライフワークと考えている仕事の一つは、「普遍史」と呼ばれる、前近代の中東地域で一般的だった歴史の書き方の受容と発展についての研究です。イスラーム教では、他の一神教と同様に、神が創造したアダムとイブから始まる人類の歴史の書き方が共有されています。その書き方が、先行するユダヤ教やキリスト教からどのような影響を受けて形成されてきたものなのか、またそれが、イスラーム教が世界の各地に広まる過程で、それぞれの地域の伝統や文化の影響を受けながらどのように変化を遂げてきたのか、について分析を進めています。中東地域と言うと、イスラームの一言で説明されてしまいがちですが、地域によって異なる様々な伝統や文化が存在しており、そこには、前イスラーム時代に由緒を持つ伝統や文化も確認できます。このような中東地域の各地域における前イスラーム時代からイスラーム時代にかけての継承の歴史の研究は、中東地域をよりよく理解することにつながる意義深い作業だと考えています。

さらに、この傍らでもう一つ取り組んできた仕事があります。それは、アラビア語・ペルシア語・テュルク語などアラビア文字で書かれた写本の研究です。写本文化は、いわゆる「イスラーム文化」の象徴の一つとして、しばしば紹介されてきたものです。ヨーロッパや東アジアとは異なり印刷文化が根付かなかった中東地域で、書籍がどのような形で編纂され、それがどのような形で書写され、所蔵され、読まれてきたのかを考えることは、中東地域の知の歴史を考える上で重要な作業になります。また、世界各国の図書館に眠るアラビア文字写本の中からは、これまで学界で紹介されてこなかった未知の文献が見つかる場合

もありますし、それが既知の文献の写本であっても、それを分析することで従来共有されていたその文献のテキストの読み方が覆える場合もあります。こういった写本研究を通じて、中東地域の歴史研究の発展に寄与していきたいと考えています。

私はこれまでに、中東地域に限らず、中央アジア、南アジア、ヨーロッパなど世界19ヶ国の図書館で写本調査を実施してまいりましたが、じつは、まだアラビア半島で調査を行った経験はありません。オマーン政府を寄付者とするこの講座の運営に携わっていくことで、今後は、アラビア半島の方での調査も進めていければとたくらんでいるところです。

この講座が創設され、その後パフワーン文庫が創設される以前、駒場キャンパスで、中東地域に関係するまとまった書籍を自由に閲覧できる場所はありませんでした。所蔵されている基本書は、キャンパスに散在する各図書館に散らばっている状態で、かつ、OPACで所蔵を確認して図書館を訪れても、××先生の研究室にある、また、見つからないなどの理由で、閲覧が許可されないということもしばしばでした。僅かの期間で蔵書が拡充されつつあるパフワーン文庫では、現在、基本的な工具書や辞書が網羅的に閲覧できる状態になっており、これにより、駒場キャンパスにおける中東地域研究の研究環境は大幅に改善されたと言えます。近年、若手研究者の減少が問題になっていますが、研究者の育成のために研究環境の整備は必要不可欠で、このパフワーン文庫を核として、今後も講座が取り組んでいかなければならない課題の一つだと考えています。このように中東地域研究の研究・教育の場として重要な役割を担う本講座の発展に向けて様々な形で貢献できればと考えておりますので、ご協力を賜れば幸いです。



2018年3月 パークの写本研究所にて

(2) 着任のご挨拶

宇田川 彩

4月よりUTCMES 特任助教に着任しました宇田川彩と申します。私は採用時の書類に、「自身を典型的な意味での地域研究者でも中東研究者でもないと考えている」と書きました。オマーン政府からの寄付金を受けて設立された「スルタン・カブース講座」の名を冠する中東地域研究センターへの応募書類としてはいささか大胆な自己紹介かもしれませんが。私はこれまで、博士課程で南米アルゼンチンに居住するユダヤ人について文化人類学的に研究し、博士論文提出後にはイスラエル・テルアビブ大学での在外研究の機会を得ました。字面だけを見れば、「中東」には掠りこそすれ決して本流ではないようにも見えるかもしれません。

アルゼンチンは、イタリアやスペインからの移住者が多くを占める移民国として知られていますが、シリア・レバノン系やアルメニア系、シリアやトルコを出身とするユダヤ系など、中東からの移民も数多く存在しています。シリア系のユダヤ人については、すでに2021年7月の駒場中東セミナーでも発表の機会がありました（本誌の「セミナー報告」をご参照ください）。移民・難民を含み、グローバルな世界において「中東」研究に関係する対象は空間的な領域にとどまらず様々な地域に展開していると言えるでしょう。

また、2018年から2020年までの1年半ほど滞在したイスラエルでは、ユダヤ研究には収まり切らない多様な発見がありました。北部のキリスト教の聖地やドゥルーズの村、南部では、ガザ地区を地平線上に目視することのできるキブツやモシャブ、ネゲブ砂漠の只中にあるベン・グリオン大学ではベドウィン研究者たちとも交流しました。私はテルアビブ近郊に居住していたのですが、「壁」を隔てたパレスチナ自治区にもたびたび訪れました。特にナブルスでは短期間ですがアラビア語研修に参加し、壁の反対側の生活を垣間見ることもできました。余談ですが、現在では同僚となった鈴木啓之さんがほとんど同時期にエルサレムでの在外研究中で、パレスチナの市場からどっさり仕入れたモロヘイヤのカレーやパレスチナビールをしばしばご馳走になったのも良い思い出です。

ユダヤ研究は、国や地域をまたがり、イスラエルを除きどの地域でもマイノリティであるユダヤ人の特徴からしても地域研究の枠内に収まり切ることがありません。欧米のほとんどの大学であれば独立した学

科として存在する「ユダヤ学」という学問分野は、日本においては現在に至るまで研究者が各大学に散在する状況にあります。

中東地域をめぐる文化人類学という方法についても同様です。堀内正樹氏がまとめた日本における「中東人類学」の流れによれば、片倉もとこ氏や宮治美江子氏らを筆頭とする「第一世代」は1960～70年代に遡るものの比較的新しいものと理解されています。研究と教育の両方の側面から見たとき、文化人類学に蓄積された方法論は、他分野で応用されるオーラルヒストリーなどの調査法にも役立てることができでしょう。また、私自身が学問を始めただけの頃はユダヤ人を対象にした文

化人類学など可能なのか？という反応は珍しくありませんでした。大塚和夫先生を始めとして構築されてきた「イスラーム人類学」の存在は大変励みになり、イスラームで出来ることがユダヤ教／人を対象としてできないはずがないという当時の思いもありこれまで研究を続けてきました。

東京大学ではすでに文学部・イスラーム学研究室や教養学部・地域研究科に学問の伝統が息づいていますが、比較的新たな学際的拠点を目指す本講座が、日本の中東研究の重要な一翼を担えるよう、短い任期ではありますが精進していきたいと思ひます。

本センターにおいては、今皆様がお手に取っていらっしゃるニュースレターの発

行と、年間13回開催される「駒場中東セミナー」の運営を中心とした業務に携わっています。どちらの業務も大変有意義で楽しく、周囲には「超ホワイト職場」に職を得た幸運を吹聴しているところですが、業務を通じて出会う多彩な研究に目を開かされながら、勉強を続けて参ります。今後もセンターの運営に皆様のご協力を仰げますようお願い申し上げます。



2018年、テルアビブ大学の研究室にて

3. 駒場中東セミナー開催報告

2021年度駒場中東セミナーは、「中東と遺産：文化・歴史・信仰の展開」を連続テーマとし、オンラインウェビナーにて開催中です。毎回70名前後の参加者から活発な質疑応答が繰り上げられます。年度後半の予定は次項をご覧ください。

第1回 2021年6月2日(水) 「パレスチナ人にとっての遺産とアイデンティティ」 鈴木 啓之 (UTCMES)

日本語で「遺産」と聞いて想起されるものは何だろうか。おおよそ相続財産、世界遺産に代表される文化的・歴史的財産などが一般的だろう。アラビア語で「遺産」にあたるトゥラスの指す内容は、おおよそ日本語でいうところの「伝統」「慣習」「文藝」の3つである。主に有形の「財産」を意味することが多い日本語とはニュアンスがやや異なり、こちらでは無形の「過去から引き継いだもの」も多く含む。「伝統文化」と言い換えても良いかもしれない。

パレスチナにおいてそうした「遺産」を構成するものは、伝統的な衣装や服飾、工芸品、料理、行事、詩歌や文藝、文学などである。それらは「パレスチナ人」としてのアイデンティティ形成に強く関わるものであり、殊にパレスチナにおいてそのアイデンティティを表明することは、望む望まないにかかわらず政治的な問題や抵抗運動との関連性を持たざるを得ない。第一次インティファダの時期にパレスチナ

の旗やPLO（パレスチナ解放機構）の字を織り込んだ「インティファダ・ドレス」が登場したこともあって、抗議運動の政治的アイコンとなった伝統的な刺繍ドレスは、その一例である。そして、その服飾品や工芸品の生産に政治組織が参入し、「商品化」が行われていった。

今回は、こうしたパレスチナ人の「遺産」と抵抗運動組織の筆頭であったPLOの活動との関連を中心に据え、その「遺産」がパレスチナにおいてどのような意味を持ち、またそれらの活動がどのような影響や変容をもたらしたのかを述べたものである。

1993年までの期間についていえば、「遺産」に関連した組織としてはサーメド（PLO殉教者遺族活動協会）がある。サーメドは、戦死者の遺族に対する雇用創出、経済的支援、教育機会の提供などを主な役割としていたが、それらに加え、パレスチナの遺産や伝統に関わる活動を行っていた。具体的には、遺族にサーメドの経営する作業場での職を与え、そこで生産された工芸品や商品を販売することなどが挙げられる。そして、難民キャンプなどに置かれた拠点では、「全てのキャンプに作業場を」のスローガンを掲げ、そこでの雇用やサーメドの提供する教育を通じて人々の「パレスチナ人」としてのアイデンティティを惹起し、政治活動に動員した。

サーメドは、雇用や教育の提供、政治活動への大衆の動員といった役割に加え、刺繍や木工品といった伝統工芸品の生産と

輸出、パレスチナの伝統文化の発信といった、経済的・文化的な役割を持っていた。77年にPLOの日本事務所が開設された後、80年代には日本国内でも「パレスチナ伝統工芸」が紹介されている。サーメドは、経済的・文化的戦略の一つとして、パレスチナの伝統文化の一部を「商品化」し、輸出したのである。

一方で、そうした伝統文化の「商品化」の引き起こす問題についても留意が必要である。上記のように「商品化」され組織的に生産・販売がなされるようになった工芸品には、「商品化」による変容や多様性の消失が指摘される。パレスチナの刺繍についていえば、分業と画一化によって、かつて存在した様々な縫い方が失われつつあることが問題視されている。

また、伝統文化の「収奪」、そして「混在」の問題も存在する。食文化や音楽などのパレスチナの文化が、「イスラエル発」として海外に輸出されていることに加え、最近では服飾に関しても、パレスチナの伝統文化からの「盗用」ともとれるような商品がイスラエルで販売されていることも問題視される。しかし、そもそも「文化」は必ずしも一つの民族集団によって占有されるものではなく、特定の伝統や文化を「○○人／○○民族のもの」と定義することは容易ではない。多くのミズラヒー（中東出身のユダヤ人）を抱えるイスラエル社会では、そうした文化にアイデンティティを持つ人々も多く存在するため、「イスラエルの伝統文化」「パレスチナの文化」という明確な線引きは難しい。こうした問題も、アイデンティティを支える伝統文化の「商品化」に関する問題の一つであるといえるだろう。

今日では、パレスチナの「遺産」に関して新たな試みが行われ始めており、先述の内容ではあまり触れられなかった、文藝や手工芸品以外の「遺産」の記録や発信が行われるようになってきている。口伝で継承されてきた祝宴歌や踊り歌などの歌詞化や音符化、婚礼などで朗誦される伝統的な定型句の文字化、民話の刊行などがそれである。それらは主にNGOや基金によって行われており、伝統文化の記録や発信、「継承」の在り方の変化が起こりつつあるといえる。

(大守洵也・東京大学教養学部教養学科 地域文化研究分科)

第2回 2021年6月16日(水) 「中世イスラームの人類史観における巨人族」 山中 由里子(国立民族学博物館)

世界には様々な巨人の伝承が存在する。日本でも「でいだらぼっち」「弥五郎どん」といった伝承が残っている。今回は、中世イスラーム世界における巨人族の表象を扱う。ここで扱われる史料は、クルアーン、クルアーン注釈書、諸預言者伝集といった宗教関連のテキスト、および民話や伝承などを多く含む博物誌である。

クルアーンにおいては、「アードの民」という巨人族や、モーセたちが出会った巨人族が登場する。このアード族は「円柱の並び立つイラムの都」を築いたが、神の教えを拒んだために滅ぼされたという。サアラビーという著者の『諸預言者伝集』は、アード族について「背丈は70~100ズィラーア(約47~68m)」で、「神のかわりに偶像を崇拜した」と伝えている。また同書には、ウマイヤ朝初代カリフのムアウィヤの時代、かつて樂園をこの世に作るうとした「アードの息子シャッダード」が建て、神に滅ぼされたという「円柱の都エラム」が、ウマイヤ朝初代カリフのムアウィヤの時代にアデンの荒野で見つかったという伝承も残されている。

クルアーンに記されているモーセに関する逸話は、神の定めた地に入らんとするモーセとその民たちが「巨大な民」に遭遇し、モーセの民のうちそれを恐れて逃げた人々が神に追放される、という内容である。このモーセの民が遭遇した巨人族についてのエピソードは、旧約聖書にも同様の記述がみられるが、ユダヤの伝承においてはこの巨人「オグ」は「レファイム」と呼ばれる墜天使の末裔とされる。さらに、サアラビーの『諸預言者伝集』には、この巨

人が「ウージュ」という名前で登場する。そこではウージュは23000ズィラーア(約15km)の背丈を持ち、モーセに討たれるまで3000年を生きたという。また大洪水の際にノアの箱舟に乗せてほしいという頼みをノアに断られるも、洪水は彼の膝にも及ばなかったという。

また、キサーイーの『諸預言者伝集』では、ウージュはカインとその妹アナクの息子の一人であり、母の命を助けたために神から長寿を授けられ、ノアの時代には材木を運んで箱舟を作るのを手伝ったが、後の時代に傍若無人で不信心になり、エジプトの王と結んでモーセたちと戦って討たれた、と伝えられている。

これらの伝承において、イスラームの宗教関連テキストにおける巨人は、「神に滅ぼされた民」「退治されてしまう先住民」「円柱の都を残した太古の民」といった属性を持つ。彼らは異形ではあるが、あくまでも人間の世界で生きる人間であり、ユダヤ教の「レファイム」のような、人ならざる墜天使的な側面も持たない。また、不信心であったり偶像崇拝者であったりするが、必ずしも「野蛮で攻撃的」というわけではない。

トゥースィーの博物誌『被造物の驚異』でも、多くの伝承が残される。第4部 諸都市の驚異では、「円柱の都エラム」について、建造者であるシャディードが神の罰によって死んだことや、また「シャディード・ブン・アード」が建て、全てが石になってしまった都をイスカンダル(アレクサンドロス)が訪れたという伝承が伝えられる。

他にも、同書では第6部 彫像・墓廟の驚異では、巨大なアダム(アダム)の墓についての記述や、中国や東方の国、イエメンなどにある巨大な墓の言い伝えが残される。

第7部 人間の驚異では、前述のアード族の話や、モーセとここではアードの末裔ということになっているウージュの戦い、ウージュの生い立ちなどが伝えられているのに加え、様々な時代・地域の言い伝えが記されている。そこではラホール(現在のパキスタンの東部の都市)で見つかった巨大な人骨やイエメンで見つかった巨大な指輪、イスカンダリーヤ(アレクサンドリア)で見つかった巨大な歯、ヤクーブ(旧約聖書に登場するヤコブ)がエジプトで出会った「アードの男」、サランディーブ(スリランカ)にいた長命で物知りの「アードの男」、イスカンダルが出会った強大な「アードの女たち」、アラブの地で追いはぎを働いた山生まれの「2人のアードの女」、

イスカンダルが出会ったバービル(バビロン)の海に住む異形の「アードの男」、中国の王が自らの先祖のものとして見せた巨大な指輪、イティル(現在のアストラハン近郊)の「アードの男」などである。

このトゥースィーの『被造物の驚異』における巨人の伝承の情報源はおおよそ次の4つに分けられる。まず1つ目は宗教説話である。ウージュやアード族、「円柱の都イラム」などの伝承がこれにあたり、上述の宗教テキストの内容をおおよそ踏襲している。2つ目はアレクサンドロスの物語である。これは中東でも「双角の所有者アル・イスカンダル」の名で知られる、驚異の目撃者としてのアレクサンドロス大王に関して残された多くの物語や伝承を踏まえたものである。3つ目は骨や遺物などの発見譚である。巨大な墓や歯、指輪などがこれにあたるが、トゥースィーが引用したであろう原典は未確定であるものが多い。4つ目は旅行記や歴史的出来事の報告である。中国の王の先祖、サランディーブやイティルの「アードの男」などがこれにあたり、登場人物や王の名前、国が記されているため、時代や場所が特定できるものが多い。

こうした『被造物の驚異』に登場する「アード」すなわち「巨人」には、上述の宗教テキストに描かれた「巨人」像から逸脱したものも多く存在する。つまり、こうした伝承では、聖書的な人類史に登場した「巨人」に加え、イラムの巨大で美しい都の遺跡の建造者や、世界の巨大な墓に眠る人間、また追いはぎや異民族など、彼ら記録者側から見て「不信心」あるいは「野蛮」「暴力的」であり、特異な食物を食べるといった「周縁の民」にあたる人々が、宗教テキストに登場する「アード」の名を借りて「巨人」として描かれ、伝えられているのである。

(大守洵也・東京大学教養学部教養学科 地域文化研究分科)

第3回 2021年7月3日(土) 「『アレッポ人』と『ダマスカス人』のアルゼンチン: セファラディ系ユダヤ人の移住と遺産」 宇田川 彩(UTCMES)

「遺産」をテーマにした本シリーズだが、今回は「中東からラテンアメリカへわたったユダヤ人の遺産」をテーマに、シリア・レバノンのユダヤ人がアルゼンチンに渡り、アシュケナジー系と一線を画したセファラディ系のアイデンティティをいかに形成していったのかが取り上げられ

た。中東研究が他の世界においてどのような役割を果たすのか改めて考える機会となった。

初めに講師は、移民からみたシリアとアルゼンチンを概観した後、シリアのユダヤ人史を概観した。オスマン帝国を由来に「トルコ人」として区分されがちなシリア・レバノンの移民だが、実際は様々な宗教が混在し、今回はその中でもユダヤ人に着眼する。エルサレム・エジプト・メソポタミアの結節点に存在するシリアでは、ユダヤ教徒がイスラーム諸王朝・オスマン帝国で自治を許され、共同体の形成がなされた。周辺国での迫害や経済的要因からセファラディ系が移住して来たり、またアメリカやパレスチナへと移住したりなどの変化をたどったが、1948年イスラエル独立を大きな契機として、現在の古いユダヤ人地区に残るものは僅かである。彼らにとって、スペイン系が多くヨーロッパらしい移民受け入れ大国アルゼンチンは一つの目的地として魅力的にうつったのかもしれない。

次に、セファラディ系とアシュケナジー系という2つのユダヤ人の違いが述べられた。セファラディ系はスペイン系で、ヘブライ文字を用いながらもスペイン語に似た言葉（ラディーノ）を話す。アルゼンチンへの移住は個人・家族単位で行われ、「トルコ人」とも呼ばれた。ダマスカスとアレppoの出身者はそれぞれ別の地区に集住する傾向があった。一方、アシュケナジー系は「ロシア人」とも呼ばれ、ユダヤ植民協会が購入した内陸の農業入植地への集団移住を行った。現在ではほとんどがブエノスアイレスに集中している。

出身地に基づき、ダマスカス人やアレppo人としてアイデンティティ形成してきたシリア系ユダヤ人は、世俗化したアシュケナジー系とは対照的に、ユダヤ教正統派の宗教的実践を保守する傾向にあった。また、1970年代にはアラブ民族主義の影響を受けて、シリア・レバノン系が「アラブ人」として再エスニック化が進行する一方で、セファラディ系が「ユダヤ人」としての意識を持つという変化も見られた。シオニズム運動の際にはセファラディによるセファラディのため、という意識を強調し、更なるアシュケナジー系との差異化が進んだ。2015年には、1492年のレコンキスタでイベリア半島を追放されたユダヤ人の末裔のうち、セファラディ系の苗字等による証明がされた者にスペイン国籍が付与されるなどアイデンティティを意識する契機ともなった。

更に、講師は実際に接した具体的な経験、人物に基づきユダヤ人アイデンティ

ティの「遺産」について考察した。紹介したのは、アラビア語の床屋を意味する「ハッラク」を苗字とする一家である。これはムスリム・キリスト教・ユダヤ教と幅広く用いられる苗字である。移住から第三世代目にあたる男性は、元々宗教を問わないシリア・レバノン系組織に参加していたが、次第にセファラディ化を強めていった。またセファラディ系シナゴグを支援しつつも、自身は敬虔なユダヤ教徒とは一線を画すとしてアシュケナジー系シナゴグに通うところにも、セファラディの縮図が見てとれる。また第4世代目、若い世代にあたるパトリシア・ハラクは宇田川講師とイスラエルで面識がある。数年前イスラエルへ移住した彼女は、イタリア系の母をもち自分がユダヤ人であると思いつつもユダヤ系コミュニティには属していなかった。しかし、祖父母ら家族の伝統を通じてセファラディ系の習慣や文化が根付いていた。

最後に、現在のアルゼンチン社会におけるセファラディの表象の不在について言及された。アルゼンチンでは一般にアシュケナジー系が表立って語られるユダヤ人の代表であり、セファラディ系については多く語られない。特にアルゼンチンではユダヤ人と農業集団移住のイメージが密接に絡み合っている。現代においてもセファラディ系とアシュケナジー系という区分は存在するが、ユダヤ人と非ユダヤ人の通婚も50%にのぼるなど、若い世代であればあるほど祖父母のルーツやアイデンティティの意識は薄れていく傾向にあるだろう。

質疑応答においては、イスラエル人になったアルゼンチン系ユダヤ人の立場や、ユダヤ人のアイデンティティについて、アルゼンチンの独自性や1980年代にホロコーストに関する語りが増えた理由などが寄せられた。

遺産という言葉から何を想像するだろうか。世代を経るにつれて消えゆくようであり、実は私たちが当たり前前に享受する日常に先人からの「遺産」が溢れているのかもしれない。

（山本つかさ・東京大学法学部）

第4回 2021年7月17日（土）

「『飛び去ったもの』の記憶：2011年以降のシリア」 柳谷 あゆみ（東洋文庫）

本講義のタイトル「飛び去ったものの記憶」は、シリア人短篇小説家ザカリーヤ・ターミルが、Facebookに掲載した短文「飛び去ったもの」に由来する。この短文

はシリアを愛しながらもシリアから出ていった人たちを示したもので、今回の講義ではこれらの出国シリア人が世にもたらす遺産、作品が紹介された。

まず柳谷講師は、シリア文学作品、もとよりシリア全体にとって大きな変革の契機となった2011年のシリア革命を取り上げた。2011年3月、シリアでは「アラブの春」に触発され「シリア革命」と銘打った非暴力の改革要求運動が立ち上がった。アサド政権側の強硬な弾圧を受けた運動は次第に武装化が進み、外来勢力も加わった結果、シリア全土に暴力が拡大、国としての一体性が失われる内戦状態となった。

2011年以前から継続して厳しい表現・思想統制が敷かれてきたシリアでは、全体主義に対する抵抗としての表現活動が、抽象・曖昧表現、メタファーを多用し、政治犯・思想犯、女性といった抑圧の対象を中心に上げながら行われてきた。しかし2011年は文化的にも大きな分岐点となった。それ以降、出国したシリア人たちは現体制と折り合うことを完全に断念し、シリアの負の歴史や現状を、日時・場所・個人名を明示した具体的な叙述として描くようになったからである。つまり、シリア人当事者としての自己認識を主張するようになったと言える。

柳谷講師は上記のような当事者の証言としての数々の文芸作品・映画を紹介した。ズィヤード・クルスーム監督は映画『不滅の軍曹』（2013年）で自分の経験を通してシリアを映し出すと同時に、一切暴力に加担したくないという自己の意思を明示した。また、アルフォーズ・タンジュール監督の映画『カーキ色の記憶』（2016年）では、短篇小説家イブラヒム・サマーイールが、今まで公の場では話すことのなかった自身の投獄経験を語りだした。一人一人が、自分がどのような立場にあって何を経験したのかを、非常に具体的に、年代・場所・個人を特定した状態で表明する作品が増えている。その結果、我々はこれらの作品における一つ一つの出来事を、個人の出来事や物語として理解し、ある程度共感できるようになった。

また、ハッサン・アッパースらによる「シリアの証言」シリーズや幅広い社会層にあるシリア女性たちの証言集『炎の下に女たち——シリア女性たちの手記——』など、証言や語りを収集し刊行する動きも高まった。これらの語り手は、自身の証言・語りを通して、自己の認識を確認することになる。講師自らが行ったインタビューにおいて、2015年のダマスカスを描いた戯曲「ダマスカス while I was

waiting」(2016年)の脚本家は、証言を重ねることで、語り手が自己認識をし、さらにその認識が他人と共有されることは、将来的に共同体の維持に資するとしてその意義を強調した。

他方、小説家たちはさまざまな課題に直面していると指摘された。イブラーヒム・サムーイールの休筆に見られるように、証言・記録が急務として重ねられる一方で、小説家は苛酷な現状を小説として表現することに非常な困難を感じている。証言の蓄積は悲劇が累積し続けていることをも意味する中で、サマル・ヤズベクは三度の帰国の記録『無の国の門 引き裂かれた祖国シリアへの旅』(2015年)で共感性の域を脱するほどの想像を絶する暴力を記録するには、自己という存在を消してこそようやく書き記せたと述べた。

出国シリア人の表現における課題も指摘された。異郷で彼らの当事者性は後退しつつある。また反体制派の統制もできていない状況で、アサド政権の独裁を脱して自分たちが主体となる共同体の未来が見えていない。加えて、インターネットで簡単に様々な情報にアクセスできる現代で、「シリア問題」は情報として安易に消化されつつある。現状で、彼らの表現活動によって「対話」と「共感」は生まれたのかとの疑問が呈された。

当事者性が後退する中で、注目している作品として、柳谷講師は作者の中のファンタジーがリアルを凌駕している作風のムスタファ・タージュディーン・ムサーを紹介した。また現状に即した形で、幻影となるシリアとのあり方を描くオダイ・ズウビーの「挽歌」(2016年)も取り上げられた。

質疑応答の中では、シリアにおける創作活動・表現の出版方法や伝統工芸の行く末などが述べられたが、中でも印象的だったのはシリア人意識についてだ。「飛び去っていく」ことは物理的・心理的で異なり、かえってアイデンティティが強化されることもあるが、柳谷講師は「シリア人意識は強まるとともにどんどん美しくなる」と述べた。自分の考える祖国シリアと現状が異なっているのは自覚しつつも、祖国に対する憧憬が強まり、実物に即さない美しさを帯びていく。

最後にオダイ・ズウビーの痛切な文言を紹介する。「僕は一人、バルコニーでダマスカスを見つめ続けた。愛してやまない、懐かしきダマスカス。燃えるダマスカス。おそらく、二度と帰ることのないダマスカス。」
(山本つかさ・東京大学法学部)

第5回 2021年8月4日(水)

『アレヴィーと遺産』

若松 大樹(メルスィン大学)

講演の最初、若松先生は、チョルム県を中心にあるブンテテという聖者廟の写真を提示した。街中にある知る人ぞ知る聖者廟であるその場所では、多くの人が安産祈願や受験合格などの大願成就のために、四大イマームの一人の系譜につながるとされる聖者に子供服などを置いている。このような「隠された」聖者廟がアレヴィーの多くに崇敬され、重要な遺産となっている。

次に講師は、アレヴィーの特徴について説明した。講師は中部アナトリアに位置する、トルコ系とクルド系の人々の多く住む地域で調査を行った。住民はムスリムのアイデンティティを持ち、六信五行や断食などの儀礼は実践せず、トルコの多数派であるスンナ派とは異なる社会的ヒエラルキーを持っているため、歴史の中で中央政府からの異端視・迫害の対象となってきた。アリーにつながる血統の出身であるデデが宗教的指導者となり、信徒を率いて儀礼を執り行う。

彼らの遺産は、聖地や聖者廟、宗教的儀礼、デデの血統である。宗教的儀礼のうち、とりわけ有名なのが、ジェムという儀礼で、アレヴィーが親戚関係にない別のアレヴィーと擬制的兄弟関係(ミュサーヒブ)を結ぶというものである。アレヴィーの人々は、いとこ婚を行うことが多いので、他集団との間に血縁関係を結ぶことが難しい。加えて、土地の奪い合いなどの経済的理由から部族間対立を防ぐため、こうした擬制的兄弟関係を結ぶ。この擬制的兄弟関係を結ぶには、両者の経済的状況や教育レベルを平等にそろえなければならないことが条件となっている。

聖者廟には、チュラーという3つのろうそくがあり、それぞれアッラー、ムハンマド、アリーを象徴している。これらは廟の儀礼をおこなう場のデデの座する場所においてある。

聖地の中で代表的なのがトゥンジェリで、ファトマ・アナ(4代カリフ・アリーの妻で預言者ムハンマドの娘婿)の奇跡により、万病に効く炭酸水がわき出るとされている。

また、奇跡の伝承なども、無形であるが重要な遺産である。そのうちの一つは、預言者ムハンマドの子孫であるハジ・クレイシュと、アリーが戦争に赴く際に協力したババ・マンスールにまつわるものである。ハジ・クレイシュが、熊と大蛇を従えてババ・マンスールを出迎えたのに対して、ババ・マンスールは、ハジ・クレイシュが組み

立てていた家の壁を操って空中浮遊することで、沢を駆け下りた。ハジ・クレイシュは、巨大な生物を操る自分よりも珍しい、生物でないものを操るという奇跡を見せたババ・マンスールに感心し、彼に付き従った。

聖者の血統も無形の遺産の一つとして挙げられていた。第4代イマームのアリーにつながる血統の者のみがデデとなる資格を持っており、彼らは親族婚を繰り返すことで血統を守っている。

講師は最後に、アレヴィーの人々の迫害の歴史について説明した。チョルム事件やデルスィム虐殺といった事件により、多数派であるスンナ派からアレヴィーの人々への攻撃が行われていた。聖地を隠す、ミュサーヒブによって部族間対立を回避する、宗教的儀礼への外部の参加を制限する、親族婚によってデデの血統を守るといった文化は、このような経緯から発展してきたといえる。

質疑応答では、講演で紹介されたアレヴィーの文化と、メディアや伝聞によって描かれる文化との違いに関する質問が多かった。

一つ目は、アレヴィーの文化協会では、集団で踊り恍惚感を得るという儀式が観光客向けに執り行われていることが多いが、これは実際のアレヴィーの文化とどれほど異なるのかについてだった。講師は、こうした儀式は自分たちは多数派のイスラム教徒とは異なる文化を持ち、差別されていることを強調し、ヨーロッパ連合などから支援金をもらいやすくするための策の一種であると述べていた。参加する個人としても、アレヴィーの文化協会の儀式に参加することは、車両税や固定資産税など免税特権などの様々なメリットがあるため、宗教的恍惚感を目的とせずとも協力する人は多いようである。

二つ目は、アレヴィーの人しか参加を許されない内部ジェムと、スンナ派や外国人でも参加できる外部ジェムの区別はいつ生まれたかというものだった。講師は、アレヴィーの人々に対する迫害が強かった時代には内部ジェムしかなく、文化協会の活動が認められてきたころに、外部ジェムが行われるようになったと説明した。

三つ目は、講演で写真が提示されたティラナの聖者廟では、ろうそくの灯が儀礼のときだけでなくずっとともっているということが述べられていたが、その理由は何かということだった。講師は、文化協会の補助があり人が常駐している聖者廟であれば、ろうそくを灯し続けることが可能だと説明した。
(上笹のぞみ・教養学部統合自然科学科認知行動科学コース)

4. 今後の駒場中東セミナーのご案内

第6回

2021年10月2日(土) 16:00~17:30
辻 明日香 (川村学園女子大学)
前近代エジプトにおけるコプト聖人：古代エジプトとイスラームのはざままで

第7回

2021年10月13日(水) 17:00~18:30
小林 春夫 (東京学芸大学)
イスラーム哲学史再考

第8回

2021年10月27日(水) 17:00~18:30
高橋 圭 (東洋大学)
アメリカでイスラームの伝統を学ぶ：スナナ派伝統主義の新たな展開

第9回

2021年11月13日(土) 16:00~18:00
松原 康介 (筑波大学)
イバード派の建築とインスピレーション：ガルダイヤとジェルバ島を中心に
近藤 洋平 (東京大学)
イバード派における建築に関する規定と現代オマーンにおける文化遺産保護行政

第10回

2021年11月27日(土) 16:00~17:30
竹原 新 (大阪大学)
イランの俗信

第11回

2021年12月4日(土) 16:00~17:30
尾崎 貴久子 (防衛大学校)
中世イスラームの食卓

第12回

2021年12月22日(水) 17:00~18:30
沖 祐太郎 (九州大学)
アラビア語圏における国際法：イスラーム法の遺産と国際法の遺産

第13回

2022年1月12日(水) 17:00~18:30
黒田 彩加 (立命館大学)
エジプト・ムスリム知識人たちが問い直す宗教的伝統と近代：宗教的厳格主義とオリエンタリズムを超えて

5. バフワーン文庫より

—5年目の節目にこれまでの文庫の軌跡を振り返る(前編)—

倉澤 理 (バフワーン文庫特任研究員)

私がバフワーン文庫の特任研究員として着任して、5年目を迎えました。

2017年4月の着任時、このような状況——人と人とが互いに距離を取り、交流しないことが自分と他者を守るのに最善であるという時代——が到来しようとは思ひも寄りませんでした。

寄附者のバフワーン氏は誰にでも開かれた空間をと、開所式(後述)の際に述べ、私自身もそのような空間——中東研究に興味を持つ者同士が、本を片手に意見交換や議論をできる交流の場——を構築できたらと考えていました。

しかしそのような空間の実現は現況では叶いません。5年目という節目に、これまでの文庫の軌跡を振り返りつつ、いつまで続くともされない「新たな日常」において、どのような空間の構築が実現可能か、またどのような場が必要とされているかを、改めて考えてみることにしました。

文庫の立ち上げ

2017年3月末、中東地域研究センターの助教だった阿部尚史先生(当時)に伴われ、カウンターと書架のみが設置された駒場キャンパス9号館3階の307号の部屋へと足を踏み入れました。

ワックスがけされたばかりのピカピカの床を眺めながら、「一から」物事を始めるという稀有な体験ができることへの高揚感と、これだけのプロジェクトを任されるということへの責任感とが入り交じり、物事が始まる前に特有の、独特な緊張に包まれました。

中東地域研究センター長の高橋英海先生、前センター長の杉田英明先生、駐オマーン大使などを歴任された森元誠二大使、当時准教授であった辻上奈美江先生、前述の阿部先生、そして事務の瀬口美加さんに助けていただきながら、着任の諸手続きを終えるとともに、購入した図書の受け入れ・登録業務でお世話になる駒場図書館のスタッフの方々にもご挨拶をし、文庫を「図書室」にするための第一歩として、本の購入を早速開始しました。

本郷にある「ナガラ図書」より、アラビア語・ペルシア語・トルコ語、そして欧文の書籍(主に辞書などレファレンス類)が到着し、空だった文庫の棚に本が少しずつ並び始めました。

物事を始めるにあたってはまずは道具の手入れから——いわゆる必須の「工具類」を揃えるというのが、この最初の段階で行うべきことでした。

初夏の陽射しがふりそそぎ始めた4月下旬、寄附者のバフワーン氏がご夫人とともに初めて文庫を訪問されました。ぎこちない対応をする私に対し、バフワーン氏・ご夫人は気さくに接していただき、私の研究についてお尋ね下さるなど、緊張をほぐして下さいました。

バフワーン氏の朗らかなお人柄に触れ、このような方のお名前を冠した図書室で働ける喜びを感じるとともに、そのお名前を背負う責任を新たにしました。

バフワーン文庫の準備に動しむ一方、この時期は中東地域研究センターの一大イベント、第8回イバード派研究国際会議のお手伝いもしました。

5月20日から22日にかけて開催されたこの国際会議には、オマーンのアブドゥッラー・サーリミー寄進宗教大臣や同大臣顧問のアブドゥルラフマーン・サーリミー氏をはじめ、世界15か国ほどこから40名近い研究者が参加しましたが、会議に参加した様々な方々からアラビア語、英語、フランス語の書籍をご寄贈いただき、バフワーン文庫の充実した未来を予感させるような、ありがたい機会ともなりました。

盛況のもと第8回イバード派研究国際会議が閉幕すると、文庫を図書室として開室するための準備がより具体的なものとなっていきました。

購入した本を書架に並べるにあたって、請求番号を付与しますが、その番号を記すシール、さらには書籍本体に押す蔵書印、寄贈印なども必要となります。請求ラベル、蔵書印、それにバフワーン氏の寄附金で購入したことを示す「Bahwan Library」シールを、文庫独自のものとしてデザインし、図書備品会社（株）伊藤伊に発注しました。さらに請求番号の付与に関しても、独自のルールを策定、採用するに至りました。



バフワーン文庫に関する事柄は、中東地域研究センターのメーリングリストで閲覧をし、先生方・スタッフの方々の承認を得る手続きを踏んで行っていますが、上記の準備期のセットアップも含め、図書関連のことで主にやりとりをしたのは、前中東地域研究センター長で、今年2021年3月に退官された杉田英明先生でした。

東京外大を卒業し、大学院生として本郷の研究室に所属した私は、杉田先生の授業に出席はしたことがありませんでしたが、そのような面識のない私を先生は全面的に信頼してくださり、私の未熟な提案に対しても、様々な吟味を加え、アドバイスをしてくださいました。

本の請求番号なども、先生と様々なやりとりをしながら、最終的に今日の形態をとるに至りました。

前期課程の学部生が多く所属するこの駒場キャンパスにおいて、中東研究に足を踏み入れようとしている学生さんが使い勝手の良い並び順をとるという考えのもと、文庫の書籍の配架順は著者名のアルファベット順になっています。

また書架も、アラビア語・ペルシア語・トルコ語などの書籍及びその翻訳（欧語訳・和訳）の「原著コーナー」、欧語・日本語が中心の「研究図書コーナー」、そして中東諸言語の文法書や辞典などの「レファレンスコーナー」に分けられ、本を探す際に初学者があまり苦労しないような配置になっています。

それには私自身の経験が生かされてい

ます。東京外大アラビア語科1年の頃、まだ習いたてのアラビア語の本を自分で探そうにも、どうしたらよいのかわからなく、途方にくれた経験によるものです。

アラビア語は文法を一通り習い終えるのも大変ですが、その後のブラッシュアップも困難を極めます。自分の興味のある本で自習するにしても、該当の本を見つけること自体、初級修了者にとっては一苦労です。こうした労苦であり時間を取られないよう、一番分かりやすい配置をとると思案した結果がこの配架でした。

杉田先生をはじめ、中東地域研究センターの先生方・スタッフの方々に様々なお力添えをいただいた結果、こうして図書室としての形を整えていくことができました。

バフワーン氏の稷門賞受賞・バフワーン文庫開所式

2017年の夏から秋にかけて、駒場キャンパス9号館307号室の壁に、「東京大学中東地域研究センター ムハンマド・サウード・バフワーン中東研究文庫」のプレート（英語、アラビア語のプレートは、バフワーン氏より贈呈）が設置されるなど、文庫の外観もいよいよ図書室めいたものになってきました。

そのバフワーン氏が東大の稷門賞を受賞するという喜ばしい知らせが届きました。東大の活動の発展に大きく貢献したバフワーン氏の功績が讃えられ、この賞が授与される運びとなりました。

10月10日、本郷キャンパスの伊藤謝恩ホールにて授賞式が挙行政され、五神真東大総長（当時）より、賞が贈られました。式でのスピーチでバフワーン氏は、人類の発展への寄与という観点から話をし、グローバルな観点に立っての学術活動について熱心に語るスピーチは列席者に深い感銘を与えるものでした。

そして翌11日、中東地域研究センターの先生方・スタッフ、石田淳研究科長（当時）など、教養学部の先生方立ち合いのもと、バフワーンご夫妻を迎え、「バフワーン文庫開所式」が執り行われました。

この開所式においてバフワーン氏は、この図書室が誰にでも開かれた場所であってほしいと述べました。

前日の稷門賞でのスピーチ、そしてこの日の開所式でのスピーチを通じ、私はバフワーン氏の学問に対する造詣の深さと知的誠実さを感じ取ることができ、このように学問・研究に理解のある方の名前を冠した施設で働くことのできる有難さを感じました。

開室へ

バフワーン氏の稷門賞授賞式、バフワーン文庫開所式が滞りなく終わり、実際に利用者を受け入れる体制の準備が本格化しました。

開所式のスピーチで表明されたバフワーン氏の意向を尊重する意味においても、また私の個人的な思いからも、バフワーン文庫は東大関係者のみならず、他大・他学術機関や一般の方も含め、広く利用可能とする方針を採用しました。

中東関係の書籍を集散的に扱う学術機関に限られている中で、お互いに助け合いながら中東研究の向上に寄与するという意味で、文庫が単なる書籍の貸出をする空間ではなく、知的交流が促進される場であってほしいというのが私の思いです。

東大関係者はもとより、他大学の研究者、さらには学会発表などで東京に来た遠方の学術機関に属する方たちも立ち寄ってくれるような場所を作り上げること、これがバフワーン氏に対してできる最大の恩返しであると私は考えています。また私自身が、同じ学問を探究する仲間との出会いを願ってものです。

利用条件や、利用登録のための利用証申請書や利用証の形式を、駒場キャンパス内の他の研究室図書室などを参考に整え、2018年2月13日火曜、ついにバフワーン文庫は仮開室するに至りました。

開室日は当時の私の出勤日の月曜と火曜、開室時間は12時から17時。

12時になると同時に「開室中」の掲示を表に掲げ、文庫の扉を半開きにし、利用者の来室を待ちます。

図書の登録作業などを行いつつ、半開きの扉に常に意識を傾け、廊下で足音がする度に、すぐ応対できるよう姿勢を正します。図書室としてのバフワーン文庫はこのように滑り出しました。

2018年3月末、約1年に及ぶバフワーン文庫開所の準備を支えてくださった、辻上先生、阿部先生が中東地域研究センターを離れ、新たな場へと赴任されてきました。そして4月より近藤洋平先生が中東地域研究センターの助教として新たに着任されました。

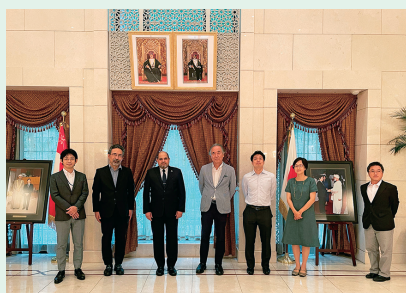
私も新しい年度より月・火の週2日の勤務から、月・水・金の週3日の勤務となり、文庫も5月の連休明けより「本開室」として正式に始動しました。

（次号へとつづく）

6. センターの活動紹介

オマーン・スルタン国大使館表敬訪問

UTCMESスタッフの高橋英海、大塚修、森元誠二、鈴木啓之、宇田川彩、倉澤理が、在京オマーン・スルタン国大使館に表敬訪問しました(2021年7月9日)。モハメッド・アルブサイディ大使からは、カブース前国王の名前を冠したセンターが東京大学に設置されていることへの評価が述べられ、今後も緊密な学術交流がなされていくことに期待が表明されました。



スルタン・カブース・ローズの大輪

2014年にハーリド・アル＝ムスラヒ駐日オマーン・スルタン国大使(当時)から駒場キャンパスに寄贈された二株のスルタン・カブース・ローズが、ゴールデンウィークと前後して大輪の花を咲かせました。今期もキャンパスへの入構が制限された状態にありますが、来年にはまた多くの来訪者にご覧頂きたいと願っています。



本誌頒布先を募集中

本誌は送料・本体とも無料で頒布しております。新たに送付を希望される研究機関や研究室がありましたら、メールアドレス info@utcmes.c.u-tokyo.ac.jp までご連絡ください。

Twitter (@UTCMES) でも随時情報発信を行っています。

●UTCMESスタッフ紹介 (2021年9月30日現在)

〈スタッフ〉

高橋 英海 (センター長、兼務教授)
森元 誠二 (客員教授)
宇田川 彩 (特任助教)
瀬口 美加 (事務補佐員)

大塚 修 (兼務准教授)
鈴木 啓之 (特任准教授)
倉澤 理 (パフワーン文庫・特任研究員)

〈UTCMES運営委員〉

高橋 英海 (委員長、総合文化研究科教授)
受田 宏之 (総合文化研究科教授・副研究科長)
真船 文隆 (総合文化研究科教授)
菊地 達也 (人文社会系研究科准教授)

大塚 修 (総合文化研究科准教授)
橋川 健竜 (総合文化研究科教授・グローバル地域研究機構長)
黛 秋津 (総合文化研究科准教授)

〈スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座運営委員〉

高橋 英海 (委員長)
橋川 健竜

大塚 修
真船 文隆

受田 宏之
黛 秋津

●発行者情報 UTCMESニューズレター VOL.19 2021年9月30日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター(スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座)
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 TEL: 03-5465-7724 FAX: 03-5454-6441 MAIL: info@utcmes.c.u-tokyo.ac.jp
<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/>

印刷：佐川印刷株式会社

〒140-0004 東京都品川区南品川5-2-10 TEL: 03-5715-0912 FAX: 03-5715-0931